



川崎千虎
（「東京芸術大学百年史」より）

有田徒弟学校と川崎千虎

勉脩学舎のあとを受けて、明治28年（1895）7月27日に有田徒弟学校が、川崎千虎（当時58歳）を校長に迎え開校しました。

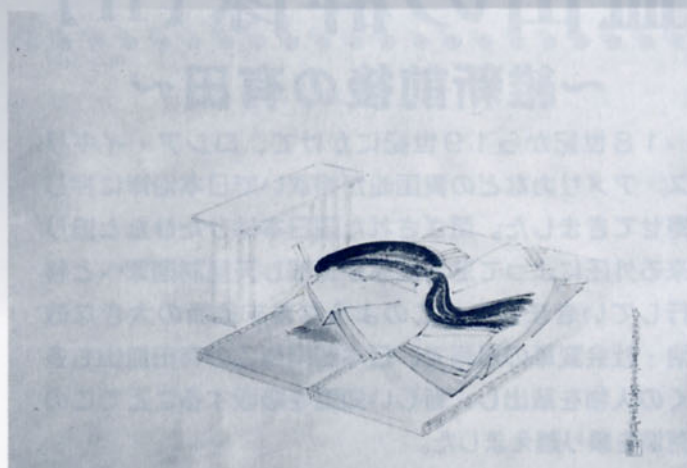
就学期間4年。教科は修身・美術・デザイン・物理科学・体操。課外が習字・読書でした。教授陣は、校長・川崎千虎（月俸90円）教授、理化学・梅田音五郎、絵画・安藤時蔵で、いずれも月俸25円。実技指導・深海竹治（深海墨之助の弟）、捻り細工・江口米助（白川）。ろくろ・榑崎武生（上幸平）でした。創業費2000円は、特志寄付で賄われ開校後の維持費は石場からの収入でした。

授業を1年間無事に終了しますと「及第証書」が交付されます。明治29年には5名の落第生があったと記録があります。

校長の川崎千虎《天保7年（1837）12・2～明治35年（1902）11・27》は尾張藩士の子弟で、京都の土佐光文に「やまと絵」を学び、明治11年、41歳で上京、内務省勧商局・大蔵省を経て博物館ご用掛りとなり、明治25年より東京美術学校の教授となっております。



有田徒弟学校については「有田町史 政治社会編II」、「肥前陶磁史考」にあります。川崎千虎については前記のほか「原色明治百年美術館」、「20世紀物故日本画家事典」などに経歴があります。その他、明治22年2月に開校した東京美術学校で同31年に岡倉天心が校長を罷免され、これに続いて天心に従って17名の教授・助教授も連袂退職し同校の日本画科が事実上壊滅した事件がありましたが、千虎もその一人として名を連ねました。この経緯について岡倉一雄著「岡倉天心をめぐる人々」に詳細が記されています。



川崎千虎筆 折之図人物画（山口秀市さん寄贈）
絵の右下に、「佐賀縣西松浦郡有田徒弟学校長 川崎千虎」とあります。

有田徒弟学校には、開校と同時に就任。どうして東京から有田へ赴任したかは明らかではありませんが、当時の有田町長・南里平一は、日本画に造詣の深い方でした。また、その頃のシカゴ万国博覧会に精磁会社や蒲地商店が出展したりして有田の業界も好調のときでしたから、川崎千虎という有名人を招聘（へい）できたのではないかと思います。

校長の月俸90円は、当時の散髪代4銭、上級酒21銭を現在に当てはめると、散髪代が7万5千倍、酒が2万3千倍になっていますので、給料を3万倍としますと270万円となります。当時の窯業界の教育への思い入れが、わかります。

川崎千虎は、明治30年3月に東京へ転任します。有田町民400名が泉山・境松で見送ったとあります。

有田徒弟学校は明治33年（1900）4月に県立佐賀工業学校有田分校となりました。現在の県立有田工業高校の前身です。明年は創立100周年を迎えます。

季刊

皿

山

秋

No.43

有田町歴史民俗資料館・館報

皿山の群像【II】

～維新前後の有田～

18世紀から19世紀にかけて、ロシア・イギリス・アメリカなどの異国船が相次いで日本沿岸に押し寄せてきました。閉ざされた国日本はひたひたと迫り来る外圧によって藩制国家が瓦解し天皇制国家へと移行していきました。このような幕末維新の大きな政治・社会変革の過程で、日本国同様この有田皿山も多くの人物を輩出し、新しい知識を吸収することでこの荒波を乗り越えました。

バブルがはじけた現在、まさにあの激動の時期と重なり合うものがあります。あの時代に登場した人物の資質や行動を知ること、これからの有田の道筋が見えてくるのではないかと、先が見えないときには歴史を見るのがいい、言い古された言葉ですが「歴史は繰り返す」わけでこの企画がこれからの有田を考える一助となればと思います。

歴史のうねりの中で

有田四百年の歴史の中で、その創成期や17世紀半ばのオランダ貿易最盛期のころと同様皿山に大変革をもたらしたのが幕末から明治にかけてのころでした。当時の有田皿山は天保12年（1841）、久富与次兵衛昌常が藩の許可を得てオランダ貿易を始めます。この製品には「蔵春亭三保造」の銘を入れましたが、これは有田の焼き物に初めて本格的に製作者（窯元）の名前が入れられたものです。ただこれらを製作したのは白川の南里嘉十や南川原山の樋口太平らです。その後安政3年（1856）には田代紋左衛門が「肥磔山信甫造」の銘を使って異国向けの磁器製造と一手販売を始めました。江戸時代末期は彼らによって輸出が独占され、慶応3年のパリ万国博覧会には主として久富・田代両商店の製品が出品されました。



士分格の田代紋左衛門に代わって貿易の実務を担当した息子の助作（田代家蔵）

この時代諸外国から開国を迫られて国内が混沌とした中、意識も距離的にも長崎に近い位置にあった有田でも日本を取り囲む情勢は確実につかんでいました。有田が生んだ碩学正司考祺はその著書「視聴漫筆」の中に「亜墨利加舟四艘が相州浦賀に着いて、魯西亞や諸尼利亜の船も次々と来航

していることや、その大きさ、船主（船長）、乗人数などを詳細に記しています。おそらく皿山でも人々の話題になったことは容易に想像できます。

佐賀藩でも藩主鍋島直正（文化11年～明治4年）を中心にいち早く西洋文明を取り入れ、大砲鑄造のための反射炉建設、日本初の蒸気機関の製造、艦船の購入などを実施しました。佐賀藩は代々長崎警備を任務としていたので、多くの藩士が長崎に留学していたことは前回触れた通りです。

世界を知った皿山の人々

この長崎で宣教師フルベッキに石丸虎五郎（安世）、大隈重信らが教えを受け、彼と有田の儒学者谷口藍田が大徳寺で語り、その周辺にいた有田の若者が大いに影響を受けたであろうことが推測されます。



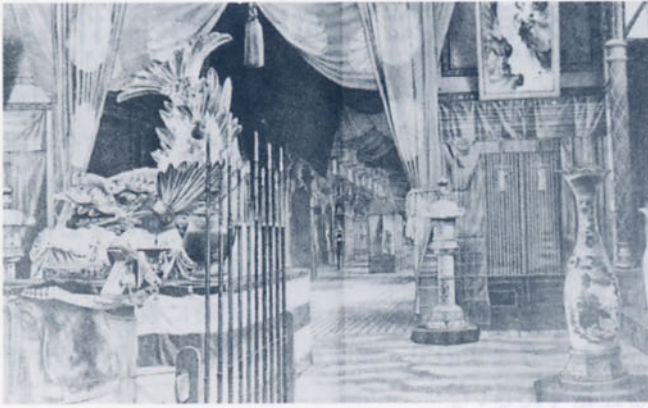
石丸虎五郎(安世) 佐賀新聞社提供

このフルベッキが大きな影響を与えたものに明治4年（1871）11月12日、横浜港から出港した右大臣岩倉具視を特命全権大使とする総勢50名からなるいわゆる岩倉使節団があります。まだ政権成立から日が浅く、国内も不安定なこの時期に木戸孝允・大久保利通・伊藤博文・山口尚芳等一国の政府首脳が大挙して長期間海外出張をする例はなく、大きな冒険でもありました。この使節団の第一の目的は相手国に対して日本の不平等条約改正希望を伝え、改正についての相手国の意見を聞くことでした。このほかに欧米先進資本主義諸国の文明と諸制度を見聞し、それを参考に国内改革を推進することも大きな目的でした。団員の中に旧佐賀藩士久米邦武が権少外史の資格で随員に加わっています。後に彼が著した「米欧回覧実記（全百巻・五編五冊）」はフルベッキの「ブリーフ・スケッチ」をもとに回覧した米欧12カ国の報告書であり、明治11年に刊行されたものです。久米はその時40歳。



明治前半期の久米邦武(久米美術館蔵)

この「回覧実記」には維新後の日本、少なくとも使節団が持った諸外国への関心事や観察、受け止め方が詳細に記されています。明治6年、帰国後久米はこの編纂に関わっていますが、翌7年春に有田を訪れています。この時彼は西洋諸国の製作場を巡回してきて磁器製作及び需要



明治6年(1873)ウィーン万国博覧会会場
日本から佐野常民を副統裁としてワグネル、納富介次郎、川原忠次郎、服部杏圃らが渡航、遣欧使節団の久米らも見学した。

の様を見聞のままに人々に伝え、とにかく「二、三
千金の旅費を惜しまず一度は必ず彼地へ渡るべし」と
渡航を勧めました。その結果同8年に合本組織香蘭社
が誕生し、9年フィラデルフィア万国博覧会に深海墨
之助・手塚亀之助・深川卯三郎が渡米。欧米で好まれ
る焼き物作りをさらに進めました。この後、フランス、
アメリカなど各国で開かれた万国博覧会に相次いで有
田から渡航しました。

維れ、新なり

それより以前の明治2年、有田に東京の商人瑞穂屋
卯三郎がコバルト顔料をもたらし、同年西洋顔料によ
る陶磁器絵つけ(陶器画真着色)を日本で最初に成功
した服部杏圃が有田を訪れ技術を伝えています。同じ
くドイツ人化学者ワグネルも有田を訪れ約4ヵ月の滞
在期間にコバルト顔料の希釈方法や石炭窯焼成などを

指導しました。これらは最後の皿山代官でありのち郡
令となった百武作十が新時代の到来を敏感に感じ取り
率先して行ったものです。しかし急激な技術の導入は
時として人々の反発も買ったようで、百武に関しては
「百武雀が飛んできて有田・伊万里を啼き荒らす」と擲
揄されたりもしました。いつの時代も先覚者は毀譽褒
貶をまぬがれないのかもしれませんが。

このように時代の流れを的確に掴んだ皿山のリーダ
ー達は技術者の育成のために、明治14年白川小学校
(有田小学校の前身)に焼き物専修学校である勉脩学舎
を開校しました。この指導にあたったのが旧小城藩士
の江越礼太でした。この4年前には白川小学校の生徒
が作った焼き物が東京・上野で開催された第一回内国
勸業博覧会で受賞しました。残念ながらこれらの作品
は現存していませんが、内務卿大久保利通より「小学
校生徒ニ書画ノ他美術製品ヲナサシメタルモノ概シテ
凡ナラス、産地ノ地ニ少年ヲ教誘シテ工技ニ習ハシム
ル注意ノ甚厚キヲ賞」されています。審査には納富介
次郎・塩田真・前島密等があたりました。

「維新」という国全体の価値観が大きく変わったあの
時代は古くからあったものを「維れ、新」にした時代
でもありました。激動期だったからこそ人材登用があ
り優れたリーダーのもと、有田は技術革新を行い世界
に通用する焼き物作りに邁進できたのではないでしょ
うか。まさに現在も維新と同じような状況ですが、歴
史の中で培ってきた伝統は有田の財産ともいえます。
この財産をいかに有効に使うか、そこに21世紀の有田
の姿が見えてくるのではないのでしょうか。

平成11年度企画展 明治の群像

有田町歴史民俗資料館では今年度の企画展として「明治の群像」
展を下記の日程で開催します。維新の時代をリードした人物や時代
が求める焼き物作りを目指して各地で開催された万国博覧会への出
展など、写真パネルや出品目録、賞状、メダルなどを中心に展示し
ます。また、期間中「進歩ジユウム」皿山の群像を今、有田に求め
られているものを「進歩ジユウム」を期間中「進歩ジユウム」を
どりのもみじが色づきます。紅葉狩りがてらおでかけください。

展示

・期間 平成11年10月3日(日)～10月30日(土)
午前9時～午後4時30分

・場所 泉山 有田町歴史民俗資料館

・観覧料 無料

進歩ジユウム

・期日 平成11年10月23日(土)
午後1時30分～3時30分

・場所 本町 有田町勤労者福祉会館 3階視聴覚室

・内容 基調講演 福岡博先生(郷土史家)
「幕末維新の佐賀と有田」(仮題)

・パネラー 辻 常陸さん(辻勝蔵子孫)

山中和子さん(深川栄左衛門子孫)

深川 巖さん(深川忠次子孫)

蒲地昭三さん(商工会議所会頭)

篠原啓一郎有田町長

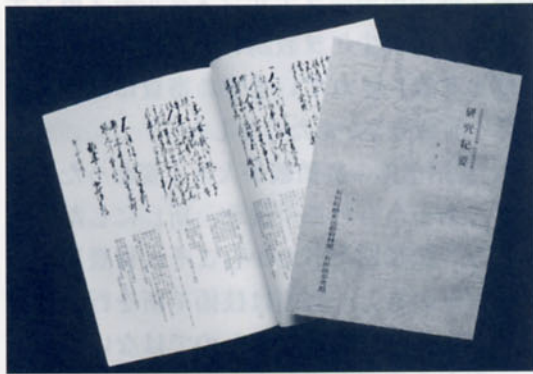
司会 久富桃太郎当館館長

※不況脱出の願いを込めて
「進歩ジユウム」の当て字
を使用しました。

研究紀要発刊のお知らせ

当館では研究活動の一環として「研究紀要」を発刊しています。このたび第8号を毎月開催している古文書教室のみなさんとの協働で完成しました。昭和63年から有田に残る古文書を読むことで先人の暮らしや歴史を知ろうと始まった教室ですが、10年がたってメンバーの読解力も相当のものとなりました。この10年の成果を形にしたものがこの本となり、町内大樽の故川内敬一さん宅に保存されていた文書の一部を読みやすくしました。内容は町役人を勤めた川内清兵衛が代官所に提出した控です。幕末の皿山の暮らしぶりや訪れた人々などがよくわかります。

この本を希望される方は有田町歴史民俗資料館で販売(一部 1570円)しておりますのでお求め下さい。



「研究紀要 第8号」
原本の下に解読文・読み下し文をつけ
わかりやすくしました。



庭には、9月の「重陽の節句」にふさわしく、貴船菊が清々しく咲いています。

7月のある日、開館して間もなく3人のご婦人が来館されました。人事異動で有田に住むことになり、有田のことを知るには資料館で勉強することが一番と思い訪れたそうです。参考館で古窯の陶片を見て、天狗谷窯跡・天神の森窯跡へと巡回されました。

また、ソウル仁徳大学産業工芸デザイン科助教授の趙炳学(チョウ・ピ・ヨンハク46歳)さんが見え、韓国語で「楽しく見せていただきました。きれいに管理・保管された状態に敬意を表します。後日機会があれば団体観賞のため再度訪問します。」とメッセージをいただきました。

さらに、アバンセ主催の県高齢者学級の皆さんがバスで資料館と陶磁美術館を見学されました。

8月には、広島文教女子大学の学生が学芸員資格取得の現地研修のため1週間、当館で勉強しました。暑さも峠をこし、すごしやすくなるこれから、お子様とご一緒に赤絵座・カラクリ人形の有田館・すぐ近くの有田陶磁美術館そしてトンバイ堀通りを散策しながら泉山の歴史民俗資料館をお訪ねになりませんか。(久)

始めました 皿山の模型作り

今年度の活動のひとつとして江戸時代の皿山を再現する模型作りがありますが、先日第一回の会合を開催しました。メンバーは30代から70代まで幅広いのですが、有田町に抱く思いはそれぞれ熱いものをお持ちのようです。9月以降2回ほど江戸時代の絵図を手に皿山を歩く会を予定しています。同時に模型作りにも取りかかりますので、興味をお持ちの方は資料館までご連絡ください。



第1回会合の様子

装い新たになりました

このほど有田町歴史民俗資料館の入り口が新しくなりました。今まで来館者の方にわかりにくいと再三指摘を受けていましたが、既存のコンクリート壁を取り除き、新たに石造の標識を設置しました。その文字は佐賀市の野中正陽さんによるもので資料館にふさわしく趣のある文字です。

有田の原点である泉山磁石場とともにご見学ください。



季刊『皿山』

通巻43号(平成11年9月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185